

廿化と子どものもの

画家

いわさきちひろ

生誕100年

松本 猛 ②0

湯あがりのあかちゃん

「小さい子どもがぎゅっとなわるでしょ、あの握力の強さはとてもうれしいですね。あんなぽちゃぽちゃの手からあの強さが出てくるんですから。そういう動きは、ただ観察してスケッチしていてもかけない」。1972年11月の「教育評論」に収められたちひろの言葉は、視覚だけでなく触覚も含めて子どもを観察していたことを示している。

ちひろは、デッサンがうまい人はたくさんいるけれど、自分のような子どもを描く人は、あ

「命」の象徴 愛と平和願う心

まりいなくとも語っていた。子 画家だからこそ言えたことだろう。育てをしながら絵を描き続けた。う。実際、ちひろは月齢によっ



「湯あがりのあかちゃん」1971年
(ちひろ美術館所蔵)

て赤ちゃんを描き分けている。育児書の仕事をしたときにも、保育園でスケッチを繰り返す、何カ月で何が出来るようになる、ということが頭に入っていた。

お座りが出来るようになった子とそれ以前の赤ちゃんの顔は大きく変化するとい、それは寝てばかりいるときと、体を起こしていることが多くなる時期では、顔への重力の加わる方向が変わるからだと説明していた。

「湯あがりのあかちゃん」は首が据わって、表情も豊かになったころの乳児である。むっちりした腕のふくらみや、まだおぼつかない指の動きが見て取れる。母親の声掛けに、小さな声で答えているのかもしれない。湯気がただよい、せっけんの匂いも感じられそうだ。まなざし

の先にはほほ笑みをたたえている母親がいる。

ちひろの絵の魅力は視覚だけでは捉えられないさまざまな要素が潜んでいることにある。しかし、表現しなかったのはそれだけではない。子どもの無垢な信頼に込める愛情がこの絵にはあふれている。一人では生きていけない、いたいけな生命を守らねばならないという思いも、底には流れているだろう。

生誕100年、没後44年という時間のなかでちひろの絵は歴史になりつつある。歴史の中に生きるということは、絵自体の美術的価値もさることながら、画家が絵に込めた思想や感性が多くの人々の共感を呼び、社会に定着するというところにほかならない。ちひろが描き続けた子どもの姿は「命」の象徴だった。子どもへの愛と平和を願う心が絵のなかに生き続けている。

(美術評論家)

〈おわり〉